

中国文化大革命への道（三）

具島，兼三郎
九州大学法学部名誉教授

<https://doi.org/10.15017/1595>

出版情報：法政研究. 36 (1), pp.39-68, 1970-02-20. 九州大学法政学会
バージョン：
権利関係：

中国文化大革命への道(三)

具 島 兼 三 郎

- 一 はじめに
わからないことだらけの中国
- 二 調子がよすぎた出足
社会主義社会に関する新理論の登場……新民主主義社会の性格……社会主義経済の中核……帝国主義の特権の取消し……土地改革……社会主義的改造―それは長期にわたる困難な過程か?……早すぎた勝利……高まる楽観ムード……人民内部の自由拡大……人民内部の矛盾……社会主義建設の総路線……大躍進……人民公社化の急進展……「共産主義社会の実現もそう遠くない」(第三五巻第五号所載)
- 三 甘くない現実―歴史の教訓
整風運動に便乗した右派の抬頭―プロレタリア独裁の否定……党内にはびこる右翼日和見主義―三本の赤旗の否定……自然災害、ソ連経済技術援助の打切、大躍進の失敗―旧地主、新旧ブルジョア分子の抬頭……劉・鄧路線の登場
- 四 社会主義から資本主義への平和的転化―ユーゴーとソ連の場合
執拗な資本主義復活の試み……「社会主義国でなくなったユーゴスラヴィア」……「ソ連における資本主義復

活のきざし」(第三五卷第六号所載)

五 社会主義社会の階級闘争—新理論の形成

ソ連理論の影響……中国の現実に合わせてなくなったソ連理論……新理論の登場……吳璉の理論……埋めがたくなつたソ連理論との溝……理論的転回点となつた十中全会

六 文化大革命に先行するもの

人民解放軍の毛沢東化……農村における社会主義教育運動……毛沢東思想の活学活用(以上本号)

七 文化大革命

八 むすび

五 社会主義社会の階級闘争—新理論の形成

ソ連理論の影響

所有制の社会主義的改造が終つて、中国の社会が新民主主義社会から社会主義社会に移行したのは一九五六年末であつたが、そのころまで中国では、社会主義社会にも階級や階級闘争があるというようなことを唱えたものは、誰もいなかった。それよりもむしろ、社会主義社会になれば、階級も、階級闘争もなくなるのではないかという考えが、多くの人たちをとらえていた。社会主義社会について何の経験ももたなかつたそのころの中国では、社会主義社会の問題についてはソ連の理論をたよりにして、手探りする以外になつたが、中国がたよりにしていたソ連の理論はソ連の理論で、所有制の社会主義的改造が完了すれば階級も、階級闘争もなくなると教えていたからである。そのために多くの人々は、このような理論の影響をうけて、社会主義社会では階級も、階級闘争もなくなるものと信じていた。例えば、中国の経済学者、千家駒、馮和法は、かれらが中華人民共和国憲法の学習用としてかいた書

物、「過度期の中国社会経済制度」のなかで、「中華人民共和国の成立は、新民主主義革命の段階が基本的に終結し、社会主義革命の段階がはじまったことを示すものである」とし、この「中国革命の第二段階」の基本的任務は、「中国に搾取もない、階級もない、社会主義社会を樹立する」(傍点 具島)ことであると説いている。すなわち、これによると、学者達が社会主義社会になれば階級がなくなるという期待を、もっていたことがわかる。同じような考えは、中共中央のなかにもあった。例えば劉少奇が、一九五六年九月中央委員会を代表しておこなった中共第八次全国代表大会での政治報告のなかには、次のような箇所があった。――

「生産手段の私有制を社会主義的共有制にかえるというきわめて複雑で困難な歴史的任務は、わが国では、いままですでに基本的になしとげられたのであります。わが国における社会主義と資本主義のあいだの、だれが、だれに勝つかという問題は、すでに解決されたのであります。」

「社会主義的改造が完成されるまでは、階級闘争はやはりひきつづき存在します。」

すなわち、ここでは、かれが所有制の社会主義的改造によって、社会主義と資本主義との闘争はすでに勝負がついたと信じていたこと、階級闘争が存在するのは社会主義的改造が完了するまでと考えていたことが示されている。しかも、この報告はかれ個人の見解をのべたものではなく、中国共産党の中央委員会を代表しておこなわれたものであったから、中央委員会としても、そのころまではこのような考えを支持していたとみていいわけである。

同じような考えは、ソ連社会の評価の中にもみられた。一九五六年末「人民日報」編集部が、中共中央委員会政治局拡大会議の討議を経てかいたといわれる重要論文、「ふたたびプロレタリアート独裁の歴史的経験について」(「人民日報」一九五六年一月二六日所載)は、「搾取階級がなくなり、反革命勢力がだいたい肅清されたのち」の「プロレタリアート独裁の任務について論じた箇所、スターリンを批判し、「スターリンのように階級がなくなつてか

らも、相変らず階級闘争の尖鋭化を強調し、そのために社会主義的民主主義の健全な発展をさまたげるようなことは、してはならないのである。」とかいた。すなわち、これによると、中共中央もまた一九五六年末ごろまでは、「ソ連ではすでに階級がなくなっている」と、信じていたことがわかる。

中国の現実にあわなくなったソ連理論　しかし社会主義社会成立後、中国が経験した反右派闘争や反右翼日和見主義闘争は、「社会主義社会には階級も階級闘争もない」という理論が、実践と両立しがたいものであることを示した。整風運動に便乗した右派の抬頭とこれに対する反撃、総路線、大躍進、人民公社に対する右翼日和見主義の反対とこれに対する反撃、自然災害を利用した旧地主、新旧ブルジョア分子の策動とこれに対する反撃—これらはすべて資本主義か、社会主義かの闘争であり、だれが、だれに勝つかの闘争であって、階級闘争以外のなものでもなかった。所有制の社会主義的改造だけで階級闘争がなくなるものでないことは、これによってみても明かであった。

所有制の社会主義的改造を世界でさいしょになしとげたのはソ連であったが、そのソ連では所有制の社会主義的改造がなしとげられたとき、これで階級対立は一扫されたと考えられた。悪戦苦闘の末に農業の集団化がようやくのことで完了したとき、スターリンはよろこびのあまり有頂天になって、ソ連では搾取階級は絶滅されたと叫び、ソ連には「もはや相互に敵対する階級は存在せず」、「階級闘争は存在しない」と宣言した。一九三六年のスターリン憲法はこのような認識を基礎にしてつくられたものであったが、ソ連における階級闘争が一片の宣言や憲法の改正で消えてなくなるものでないことは明かであった。一九三七年になると、その前年搾取階級の絶滅を宣言したばかりのスターリンは、三月三日のソ連共産党中央委員会総会で、「階級闘争の激化」を訴えた。これはまことにどうもつじつまのあわぬ話であった。敵対階級のなくなった社会で階級闘争が激化する筈がなかったからである。スターリンはつじつまのあわなくなつたこの議論に、つじつまをあわせるために、国際帝国主義の破壊活動という外部的要因をもち出

してきて、それを説明しようとして試みた。農業集団化の成功によってトロツキー、ジューヴィエフ派その他の反革命分子は、ソ連国内では完全にかれらの階級的基盤を失い、たよるべきものがなくなったので、こんどは国外にかれらの後援者を求め、国際帝国主義と提携して、そのスパイになり下り、国際帝国主義の援助をうけて破壊工作にのりだした。そのために激化する筈のない階級闘争がソ連の国内で激化したという説明が、すなわちそれであった。国際帝国主義はたしかに社会主義社会のなかに階級闘争を存続させる一つの条件であったが、それだけが唯一の条件ではなかった。中国自身の経験からしても、それ以外にも階級闘争を存続させる条件はいろいろあったからである。

社会主義社会には、打倒されたが、機会があればもう一度かれらの「天国」をとり戻したいと考えている旧地主や旧ブルジョアジーがあった。かれらは社会主義建設については、いつもこれを白眼視していたので、それが一寸でもうまく行かないことがあったり、またそのために何か不便なことがおこったりすると、針小棒大にそれを周囲のものに宣伝し、資本主義のよかった点や便利であった点をそれに対比させて、資本主義に対する人々の郷愁を煽った。

また生産手段が社会化されたといっても、公私共営企業では旧ブルジョアジーはまだ固定利子をもらっていたし、資本主義の残滓が完全に一掃されていたわけではなかった。人民公社においても、社員達はかれらの自留地や家畜、家禽、小農具、小工具をもつことを許されていた。固定利子は搾取の存続を意味したし、小商品生産はブルジョアジーを生み出すものであった。また公私共営企業にしても、人民公社にしても、経営のいゝものと、わるいものとは、そこで働く人達の収入の上に大きな開きがあったし、同じことは国营企業に対して、その成績のよしあしに依りてあたえられる奨励金の多寡によってもおこった。そこにブルジョア的な単位本位主義の生まれてくる根拠があり、それを推進するブルジョア分子の生まれてくる基盤があった。社会主義社会にはこのように打倒された旧ブルジョアジーのほかに、社会主義社会の体内から生み出される新ブルジョア分子がいた。

周囲にこれらの新旧ブルジョア分子がいると、労働者階級や政府の職員の間からも、その影響をうけて、墮落変質するものがあらわれてきた。このほか旧ブルジョアジーや旧地主がながい間かゝってつくりあげた古い習慣や古い思想、古い風俗も、労働者や農民、政府職員の間にも、無視することのできない大きな影響力をもっていた。

すべてこれらの条件が、国際帝国主義の存在と相俟って、社会主義社会に階級を存続させ、階級闘争を存続させるのであった。もとより社会主義社会においては、階級が存続し、階級闘争が存続するといっても、その形態が資本主義時代のそれと同じでないことは、いうまでもないことであつた。

ところが、ソ連ではスターリンの死後、理論がこのような方向に発展させられないで、搾取階級絶滅宣言の理論がそのまま踏襲されスターリンの階級闘争激化論の方が逆に、かれの被害妄想の産物として斥けられた。スターリンの後援者達は、スターリンが病的敏感さで感じとっていた社会主義社会の階級闘争を、アッサリ否定してしまった。そしてそのような考えの上に、かれらの「全人民の国家、全人民の党」の理論を發展させた。しかし、これは社会主義建設の問題をめぐる、右翼日和見主義ないし修正主義との激しい闘争をくりひろげてきた中共主流派からみれば、中国の現実に合致しない理論であり、実践的にも支持しがたい理論であつた。

新理論の登場 一九六〇年代に入ると、中国の現実はもはやソ連からの借りものの理論では、どうにもならないところまできていた。六〇年代に入るとともに、中国においてそれまでおこなわれていた社会主義社会に関する理論を、中国の現実に照らしでもう一度再検討しようとする気運が出てきたのは、そのためであつた。それは別のいい方をすれば、右翼日和見主義ないし修正主義に対する闘争という中共主流派の実践的必要にもとずいて要請された課題であつたともいえる。それだけに新たに形成される理論は、こうした要請に答えるものでなければならなかつた。

社会主義社会にも階級闘争があることについて、人々の注意を喚起したさいしょの文献は、一九五七年二月の毛沢

東の「人民内部の矛盾を正しく処理する問題について」であったが、この外にも陸定一の「労農大衆が哲学を学ぶ意義」(「学習」一九五八年第一九期)や中共武漢會議の決議「人民公社の若干の問題について」(一九五八年一月二日)などがあり、それらはいずれも新理論の形成に寄与するものをもっていたが、なんといつてもこの問題と真正面から取組んだ論文として注目すべきものは、一九六〇年にかかれた二つの論文であった。吳璉の「社会主義社会の過渡的性質」(「經濟研究」一九六〇年第五号)と陶鑄の「過渡期の法則の問題についての議論」(「人民日報」一九六〇年八月五日号)が、すなわちそれであった。これらはいずれも反右派闘争や反右翼日和見主義闘争の経験をふんまえてかゝれたものだけに、直截に時代の要求に答えていたからである。

吳璉の理論——「社会主義社会の過渡的性質」 中共主流派から「右翼日和見主義」、すなわち「修正主義」と非難された人たちに共通していた態度は、これらの人々が、社会主義社会を共産主義社会に移行させるためには、その前にまず社会主義社会自身を安定させ、強化する必要があるとしていた点にあった。三本の赤旗(総路線、大躍進、人民公社)がこれらの人達によって非難されたのも、それが社会主義社会に不安をもたらし、社会主義社会を弱化するおそれがあると考えられたからであった。これに対して吳璉は、そのような考えはたゞ社会主義社会から共産主義社会への移行を阻害するだけであると批判した。かれの論旨というのはこうであった。――

社会主義社会は共産主義社会の一段階であり、したがってその本質は共産主義的である。しかし社会主義社会は共産主義社会の低い段階であるから、そこにはまだ旧社会の名残りをとどめている。

社会主義社会の共産主義的性質は、次の諸点にあらわれている――

一、生産手段の私有が廃止され、それらがすべて社会の共有となっていること。

二、労働過程において人間の人間による搾取が撤廃され、工業と農業、都市と農村、頭脳労働と肉体労働との間の敵対関係がなくなっていること。

三、分配の面では、社会の生産物がすべて勤労者の所有となり、勤労者の共同の利益をもとにして、社会によって統一的に分配されていること。

これに対して、社会主義社会のなかにある旧社会の名残りと思われるものは、次のような形をとって残っている――

一、同じく社会主義社会といってもその発展段階によって、すべての生産手段が全人民的に所有されている社会主義社会と、生産手段が一部全人民的に、一部集团的に所有されている社会主義社会とがあるが、いずれの場合にもそこにはまだブルジョアの権利の名残りが残っている。国营企業においても、奨励制度がとられ、利潤の一部がその利潤をあげた企業の職員、労働者の集団や個人の福利にあてられているかぎり、それは全人民的所有制の経済といっても、なおブルジョアの権利が残っているといえる。全人民的所有制の経済においてもこの通りであるから、集团的所有制の場合においてはなおさらのことである。集团的所有制というのは、個人的所有制から全人民的所有制への過渡的な所有形態であるから、そこにはブルジョアの権利の名残りは全人民的所有制の場合よりも、もっと色濃くあらわれている。そこでは集団の構成員は、まだ自留地や少数の家畜、家禽、小農具、小工具、副業に対する個人の権利をみとめられているからである。

二、労働過程において人間の人間による搾取はなくなり、工業と農業、都市と農村、頭脳労働と肉体労働の敵対関係は終りをつけているが、共産主義的な平等関係はまだ実現されていない。したがって、工業と農業、都市と農村、頭脳労働と肉体労働との間には依然として差異がある。

三、分配の面では、社会の生産物が勤労者の所有となり、勤労者の共同の利益をもとに、社会によって統一的に分

配されているが、その分配はまだ各人の欲望にもとずいておこなわれるのではなく、勤労者の提供する労働の質と量とに応じておこなわれる。この点ではやはりまだ等価交換の原則を体现しており、ブルジョアの権利を残しているといえる。等価交換というのは、商品の所有者が、商品所有者としての権利の平等を基礎にして、相互に交換をおこなうことをいうのであって、それはブルジョアの権利関係以外のなものでもないからである。

では、社会主義社会は右にのべたような共産主義的な要素とブルジョアの権利の名残りとだけから成っていて、第三の要素はないのであろうか？ 共産主義的でもなければ、ブルジョアの権利の名残りでもなく、社会主義社会特有の要素というものはないのであろうか？ そういう要素はない。人によっては、労働に應ずる分配を社会主義社会特有の要素と考える人もあるが、これも仔細に点検してみると、社会主義社会特有の要素とすることはできない。労働に應ずる分配といっても、勤労者達はかれらの生産物を「働いただけそっくり」受けとるわけではない。かれらの生産物の一部は控除されて、社会全体のため、ないしはかれらの属する集団のために使われる。個人の消費のために分配されるのは、勤労者達の生産物のなかから社会全体ないし集団のために分配される分を控除した残りである。これを個人に分配するときには、提供された労働に「正比例」して、分配がおこなわれる。多く働く人には多く、少く働く人には少く、分配がおこなわれることが、すなわちそれである。

このうち社会全体のため、ないし集団のためにおこなわれる分配は、社会主義的分配のなかの共産主義的要素であるということが出来る。これに対して個人の消費のためにおこなわれる分配は、前にのべたように等価交換の原則を体现しており、ブルジョアの権利の名残りであるといえる。一部の人はこれをもって「社会主義社会特有の要素」といつているが、それは正しくない。第一労働に應ずる分配を社会主義社会の分配における共産主義的要素と切りはなして考えること自体がおかしい。社会主義的分配における社会に対する分配と個人に対する分配の比率は、なにも

固定したものではないのである。社会の必要のために控除される部分と個人に分配される部分との比率は、時期を異にするにしたがって、また集団を異にするにしたがって、異ってよい。社会主義社会の分配は、一面においてはブルジョアの権利の否定であるが、他面においてはブルジョアの権利の残存を肯定している。労働に応ずる分配を基本的に保持するという条件のもとでの、労働の量と報酬の量との比例は、状況に応じて変えてもよい。高度に発展した社会主義社会では、収入の差を縮少し、労働に応ずる分配によってもたらされる不平等を縮少することができる。発展段階の低い社会主義社会ではそれはやれない。それをやると、生産力の発展が阻害されるからである。

社会主義社会では、労働に応ずる分配と並行して、必要に応ずる分配の萌芽形態ともいべき供給制がある。供給制のことについては前にのべたから、ここではくりかえさないが、それは明かにブルジョアの権利のワクを越えるものであり、社会主義的分配における共産主義的要素であるといえることができる。労働に応ずる分配と供給制による分配との比率をどうするかは、社会主義社会の発展状況や社会主義社会のおかれている状況によって異なる。

こういう風に考えてみると、社会主義的分配における共産主義的要素とブルジョアの権利の名残りととの関係を、なにか動きのとれない固定的なものともみたり、「労働に応ずる分配」をなにか神聖不可侵の原則であるかのごとく考えたりすることは間違いであることがわかる。

一部の人は、社会主義社会を資本主義社会と共産主義社会との間にある、長期にわたる凝固した独立の社会経済構成体とみなしているが、このような考えも正しくない。社会主義社会はあくまでも共産主義社会の低い段階であって、共産主義的要素が旧社会の名残りよりも主導的地位をしめている社会である。そこにはこの社会のなかの共産主義的要素を絶えず拡大し、旧社会の名残りを絶えずとり除いて行こうとするプロレタリア的勢力がある半面、共産主義的要素の拡大をできるだけ食い止め、それをとり除き旧社会の名残りをなるべく保存し、拡大しようとするブルジ

ヨア的な勢力があり、これら二つの勢力の間には、絶えず階級闘争がおこなわれる。二つの勢力の間の闘争はプロレタリア的勢力がプロレタリアート独裁という強力な後楯をもっていることによって、通常の場合はプロレタリア的勢力にとって有利に進行するが、党や国家、企業の指導権を握っている幹部が腐敗、墮落し、退化、変質すると、形勢が逆転し、ブルジョアの勢力にとって有利になることもある。したがって社会主義社会を共産主義社会に移行させようとするならば、社会主義社会を資本主義社会と共産主義社会の間に介在する独立の社会経済構成体とみなし、二つの社会主義的共有制(全人民的所有制と集団的所有制)の並存と労働に応ずる分配に満足し、「社会主義的秩序」の強化を要求し、ブルジョアの権利の名残りを肯定し、美化するものと徹底的に闘争しなければならぬ。

共産主義への発展という見地からすれば、いつの日か当然に除去さるべきブルジョアの権利の名残りまでも含めて、社会主義社会を全体として強化するなどというは、ナンセンスである。それは革命の停顿を求めること以外のなものでもないからである。社会主義建設は、抽象的、包括的に社会主義的生産関係—その中には共産主義的要素もあり、旧社会の名残りもある—を発展させることではない。それは共産主義的要素を拡大し、旧社会の名残りをとりぞくことであり、共産主義への移行を積極的に、立派に準備することである。もっともこういったからといって、ブルジョアの権利の利用を即刻やめるべきだというのではない。社会主義社会は共産主義社会に比べるとまだ生産力の低い社会であるから、そこにおいてブルジョアの権利を適当に利用することは必要である。しかし、それを物神化してはならない。それはやがていつかは廃棄さるべき「必要的害悪」にすぎないからである。肝要なことは拡大すべきものと、縮小すべきものとを、ハッキリ識別した上で、利用すべきものは利用するという態度をとることである。

一部の人々は、社会主義社会を共産主義的要素と資本主義社会の名残りという二つの矛盾の対立面の統一と闘争という観点から捉えず、社会主義社会を、矛盾も、闘争もなく、量的変化があるだけで、質的变化のない社会として捉え

ている。これらの人々には、何を拡大し何を縮小すべきかという観点がないから、目先の経済活動や技術活動にその注意を奪われ、眼前の個人的利益に執着し、すでにかちえた成果に満足し、いつの間にか右翼保守思想のとりこになる。しかし、社会主義社会はたゞ量的変化があるだけの社会ではない。そこでは生産力の量的増大や人民の政治的、思想的、道徳的自覚の向上にともない、古い習慣や古い伝統、古い思想を打破し、人と人との関係を絶えず改善し、次々に新しい気風を打ち立て、局部的な質的变化をおこし、新しい共産主義的要素が旧社会の成分、要素、痕跡をしだいに克服して、共産主義社会への移行を準備する段階であり、その意味においてそれは過渡的な社会である。社会主義社会から共産主義社会への飛躍は、自然界にみられる突然変異のように一瞬にしてやってくるものではなく、それは長期間にわたって局部的な質的变化を積み重ね、積みかさねてゆくことの総合的な結果としておこるのである。こうした局部的な質的变化の積みかさねを意識的につくり出す過程が連続革命である。この連続革命によって社会主義社会がその体内に新しい質的要素の蓄積をふやし、古い質的要素の衰亡を促進することによって、はじめて共産主義社会への飛躍が準備されるのである。かつて中国では新民主主義社会から社会主義社会に移行する時期を「過渡期」とよんだが、社会主義社会から共産主義社会に移行する時期もまた「過渡期」である。一言にしていえば資本主義から共産主義に至る全歴史的時期が過渡期である。そしてそこにおける連続革命の勝利と新民主主義から社会主義へ、社会主義から共産主義へと、革命段階の発展を保證するものが、プロレタリアート独裁である。

しかるに、右翼日和見主義すなわち修正主義は、社会主義社会をこのようなものとしてとらえず、それをコチコチの、凝固した、不変のものとしてとらえ、それを強化しようとすることによって、実は旧社会の名残を安定させ、資本主義の復活を助けている。したがってこれを撃破することなしには、共産主義への発展を期待することはできない。

以上が呉璉の理論の要旨であったが、陶鑄もまた基本的な点では、これと同じ考え方の上に立って、その理論を展開した。かれもまた社会主義社会を過渡的性質の社会とみ、それを独立の社会経済構成体として、定型化することに反対した。そこでは成長しつつある共産主義と死滅しつつある資本主義とのたゞかいが、その存在の全期間にわたってつづき、前者が後者をしだいに圧倒してゆくことによつて、社会主義から共産主義への発展が保証されるとした。社会主義社会は共産主義社会よりも生産力の低い社会であるから、そこにおける分配は、労働に應ずる分配でなければならぬが、労働に應ずる分配はあくまでもブルジョアの権利の名残りであるから、それを唯一絶対のものとして物神化してはいけない。経済活動については、ただ経済法則や独立採算を考えるだけでは駄目であつて、政治的計算を常に考えのなかにいれておかなければならないとした。

埋めがたくなつたソ連理論との溝 これらの論文がかゝれたのはいずれも一九六〇年であり、当時中ソ関係はすでに少しづつ悪化しつゝあつたとはいへ、まだ決定的な破局を迎えるところまではいっていなかった。そのためにかれの論文も直接ソ連の理論を批判するという形ではかゝれていなかったが、それにもかゝらず、その内容は明らかにソ連の理論と対立するものであつた。ソ連の理論では、これらの人々の理論とは反対に、社会主義は独立の生産様式として、また社会主義社会は独立の社会経済成体としてとらえられ、労働に應ずる分配は社会主義社会特有の経済法則とされていたからである。ここでは資本主義から社会主義に至る時期と、社会主義から共産主義に至る時期がハッキリ区別され、前の時期は過渡期とよばれて、そこには階級と階級闘争があるからプロレタリアート独裁が必要であるが、後の時期には階級と階級闘争がなくなるので、プロレタリアート独裁は不必要になるとされた。それにもう一つ、ソ連の理論が呉璉や陶鑄などの理論とちがう点は、政治よりも経済を重視し、生産力の発展に大きな期待をかけている点であつた。生産力を高めて行きさえすれば、他の問題は自ら解決するといった式の楽観論をもっていたこ

とが、すなわちそれであった。思想革命であるとか、人間改造といったものは、生産力が発展すれば、自からその結果として達成されると考えられていた。工業生産力が高まってトラクターやコンバインがどしどし農村に供給され、農民がそれらの農業機械を使って農業を営むようになれば、かれらの頭も自然変ってくる。コルホーズ員の自留地や副業などにしても、コルホーズの生産力が高まってコルホーズ員に対する分配がふえれば、そんなものは不必要になるから、コルホーズ員自身がその返還やそれをやめることを望むようになる。生産力が高まれば、学校、図書館、その他の文化施設もふやすことができるし、労働時間を短縮して、それらを利用する時間的余裕をつくりだすこともできるから、人々の文化水準も自ら高まり、その考え方も自ら変わってくる。そこで肝要なことは生産力を高めることであり、そのために物質的刺戟を活用することが必要なら、大いにそれを活用することである。資本効率をあげるために生産資金に「利子」をつけることが必要なら、それをつけることもよからうし、企業の成績を評価するのに「利潤」を用いる必要があれば、それもよからう。収入の格差が拡大されても、それによって生産力の発展がもたらされれば、それでよいではないか。これがソ連の生産力第一主義の考え方であったが、それは中国に新たにおこってきた理論と到底両立しうるものではなかった。中国の新しい理論では、経済に対する政治の統師が強調され、生産力の発展が、人間の絶えざる思想的、道徳的改造や人間関係の調整によって裏打ちされなければ、社会主義から共産主義への発展は不可能であるとされていたからである。

中国に抬頭しつつあったこのような新しい理論とソ連の理論との間の溝は、一九六一年ソ連共産党第二二回大会において「全人民の国家、全人民の党」の理論が打ち出されるにおよんで、もはや埋めがたいものとなった。

理論的転回点となった十中全会　一九六二年九月、中国では、中国共産党の第八期中央委員会第一〇回全体会議（十中全会）が開かれたが、そこではそれまでにすでに中国にあらわれつつあった新しい理論が検討され、社会主義

社会の階級闘争に関する理論が、党の公式の理論として採択された。それとともに中国はソ連の理論とハッキリ訣別した。十中全会のコミニケはその訣別宣言ともいうべきものであったが、その中には次のようにのべられていた――

「第八期中央委員会第一〇回全体会議は、プロレタリア革命とプロレタリア独裁の全歴史的時期には、また、資本主義から共産主義への移行の全歴史的時期には、プロレタリアートとブルジョアジーとのあいだの階級闘争、社会主義と資本主義との二つの道の闘争が存在することを指摘した。打倒された反動支配階級は滅亡に甘んぜず、かれらとつねに復活を企んでいる。同時に、社会にはブルジョアジーの影響と旧社会の習慣の力が残っており、一部小生産者の自然発生的な資本主義的傾向が存在している。したがって社会主義的改造をうけていない若干の人々がまだ人民のなかにいる。かれらは、数は少く、数パーセントをしめるにすぎないが、機会さえあれば社会主義の道を離れて資本主義の道を歩もうとする。この状況のもとでは階級闘争はさけられない。これはマルクス・レーニン主義が早くから明らかにしている歴史的法則であり、われわれが決して忘れてはならないものである。」

しかし、これはソ連の理論に対する訣別であると同時に、中国共産党自身の過去の理論との訣別でもあった。新たに定式化された党の公式理論によれば、社会主義社会には階級がないとか、社会主義と資本主義の闘争はもう勝負がついたとか、階級闘争がつづくのは所有制の社会主義的改造が完了するまでとか、ソ連にはもう階級がなくなったとかいった式の議論は、すべて誤りだということになるからであった。また「中国において共産主義社会が実現するのにも、そう遠い将来のことではない」というような認識も、正しいとはいえなかった。公式の理論によれば、「社会主義社会はひじょうに長い歴史的段階」であり、「社会主義と資本主義のあいだのだれがだれに勝つかの闘争は」、「数十年では駄目であって、百年から数百年の時間をかけなければ、成功するものではない」とされていたからである。

六 文化大革命に先行するもの

中国共産党の第八期十中全会において「社会主義社会の階級闘争」に関する理論が定式化されると、次に問題になったのは、それを実践することであったが、この場合中心的な問題になったのは、「修正主義」（右翼日和見主義）との闘争であった。ところが「修正主義」との闘争ということになると、この点で一番豊富な経験をもっていたのは、人民解放軍であった。人民解放軍はこの理論が党の公式の理論として定式化されるずっと以前から、この問題と取り組んできたからである。

人民解放軍の毛沢東化 一九五九年彭徳懐が国防部長を罷免されて林彪がそのあとを襲ったとき、かれが党から托された使命は、人民解放軍のなかに滲透した「修正主義」の影響を一掃することであった。

「人民解放軍は中国全土が解放されるまで、中国各地に分散し、それも主として農村で作戦していたために、各部隊の軍事制度はかならずしも統一されていなかった。しかし、解放後は各地に分散していた部隊が兵営に集結され、国軍として再出発することになったので、その機会に指揮、編成、訓練、規律、兵站の統一がおこなわれ、人民解放軍ははじめて統一的な軍事制度をもつことになった。ところが軍事制度の統一に当って、中国が参考にしたのはソ連の経験であった。一九五五年それまで階級制度のなかった人民解放軍に階級制度がもちこまれたのもその結果であったといえる。」

このようにして人民解放軍がソ連の軍事制度をとりいれたのはよかったが、とりいれられた軍事制度はそれといっしょに、人民解放軍とは生い立ちを異にする外国軍隊の考え方を、それ自身のなかにもちこむ結果となった。人民解放軍はもともと外国の軍隊とはひじょうに性質を異にする軍隊であった。それは外国の軍隊のようにたゞ戦争をする

だけの軍隊ではなく、生産建設にも参加し、民衆工作もやる軍隊であって、戦闘、生産建設参加、民衆工作の三大任務をもつ点に特徴があったからである。しかし、今まで農村に分散していた軍隊が兵営に集結され、作戦よりも訓練を主とする段階がやってくると、軍隊と人民大衆との接触も以前ほど密接ではなくなった。それとともに軍隊のなかには、以前にはなかった考え方がおこってきた。軍隊が生産建設活動に参加したり、民衆工作に従事したりすることは筋ちがいであり、軍隊は軍隊本来の任務である戦闘訓練に専念すべきであるという考えが、すなわちそれであった。軍隊内のこうした声は、大躍進や人民公社化運動がはじまって、軍の生産建設活動にひっぱりだされる機会が多くなると、いよいよ強くなり、軍を産業労働予備軍化することは訓練の防げになり、「得るものより失うものの方が多い」という不満が高まってきた。廬山会議における彭徳懐の党主流に対する批判はいわば、こうした軍内の不満を代表したものであった。また人民解放軍のなかには、党主流が軍の三大任務のうち、生産建設参加や民衆工作の方だけを重視して、軍の近代化について力瘤をいれないことについても、不満があった。このような不満は彭徳懐国防部長やかれにつらなる数十名の高級将校が罷免されてのちも、なお軍のなかにくすぶりつづけていたが、自然災害期がやってきて大躍進の行詰りがだれの眼にも明かになり、人民公社が苦難のドン底につきおとされ、軍に対する食糧の配給までが減らされるような段階がやってくると、いよいよ抑えがたくなった。それとともに軍内には、思想の動揺と軍紀の弛緩、士気の荒廃が目につくようになった。

こうした状況は「修正主義」を嘯む格好の地盤であったから、林彪は軍の思想教育と士気の振作に全力を傾注した。かれは「修正主義」を克服する近道は、全軍の将兵に毛沢東思想を学習させることにあると考えていたので、全軍の将兵に毛沢東思想の学習を活発におこなわせるとともに、毛沢東思想をそれぞれの持ち場に応じて、活用するよう奨励した。これは前のべたごとく、個人崇拜の発展をおそれて、毛沢東思想学習の義務を党規約からはずした

劉小奇や鄧小平の行き方とは異質のものであったがそれにもかゝらず毛沢東思想の中国においてもっていた大きな權威にかんがみそれを禁止することは、さすがに劉少奇や鄧小平においてさえできなかった。林彪はこうした問題を巧みに縫うて、かれの道を歩きつづけた。毛沢東の軍事思想の特徴は、装備や技術の要素も重視するが、それよりも人の要素をもっと重視し、三大任務の遂行によって、軍が人民と一体化し、それによって戦争を勝利にみちびく点にあったが、人民解放軍の将兵の一人一人がこのような思想を自分のものにすれば、「修正主義」の入りこむ余地はないというのが林彪の信念であった。こうした信念にもとずいてかれは、「修正主義」に毒された軍の建てなおしにのりだした。そしてかれの工作は着々として成果をあげていった。

一九六〇年一〇月からかれは軍内に三八作風培養運動をはじめた。三八の三は、確固たる正しい政治方向、困難に耐えぬく質実な工作态度、弾力的かつ機敏な戦略戦術の三句を意味し、八は、団結、緊張、厳肅、活発の八文字を意味した。かれはまた中国共産党中央軍事委員会拡大会議の承認を得て、人民解放軍の政治工作に関する重要な原則を確立した。有名な「四つの第一」の原則がすなわちそれであった。「四つの第一」というのは――

一、武器と人との関係を処理する場合には、人の要素を第一とする。

二、各種工作と政治工作との関係を処理する場合には、政治工作を第一とする。

三、政治工作のなかの実務工作と思想工作との関係を処理する場合には、思想工作を第一とする。

四、思想工作のなかの書物のなかの思想と活きた思想との関係を処理する場合には、活きた思想を第一とする。

というのであって、人民解放軍の将兵が事に処理するに当たってもつべき心構えを、毛沢東思想の立場から実に適格に示したものであった。このほかかれは又軍内に四好中隊運動をおこした。一、政治・思想工作、二、三八作風、

三、軍事訓練、四、生活管理の四点にわたってすぐれた部隊に「四好中隊」の称号をあたえて、その名譽を表彰し、

全軍が「四好中隊」になることをよびかけた運動が、すなわちそれであった。

このようにして熱心な指導がおこなわれたために、毛沢東思想の学習運動は全軍を風靡し、そのなかから雷鋒や王杰のような学習英雄があらわれ、一時憂慮されていた軍内の思想の動揺もおさまり、軍紀はひきしめられ、士気は振作された。これによって一時軍内にはびこっていた「修正主義」の勢力は、大きく後退した。

農村における社会主義教育運動

林彪によっておこなわれた人民解放軍の思想教育は、農村に対しても大きな影響をあたえた。「資本主義復活の危険は社会主義社会においてもあるから、階級闘争を忘れてはいけない」という毛沢東思想を、軍隊で身につけて復員した兵士たちが、村に帰ってみると、そこには旧地主や富農、反革命分

子がかねらの支配権の復活をめざして、しきりに蠢動していた。創設早々自然の大災害に見舞われた人民公社では、国家の救済資金や救済物資の分配、生活貸付金の配分、人民公社間の物資流通にともなう取引など、複雑な仕事が多かったが、よみかきのできるのをいゝことにして、巧みに人民公社の会計や出納員にもぐりこんだ旧地主や富農たちは、この千載一遇の機会を利用して、かれらの私腹を肥やし、かれらの勢力挽回を図ろうとしていた。かれらは公社のために働くような顔をしながら、蔭でこっそり公社の帳簿をゴマ化して、公共財産を横領したり、それを闇市に横流ししたり、幹部を誘惑、買収、籠絡して、公社の方針を自分達に都合のいゝように変更させたり、幹部をそこのかして、勝手に個人企業を発展させたり、人をやとって搾取をしたり、高利貸をおこなって暴利をむさぼったり、ひどいものになると土地の売買をおこなったものさえあったことが、すなわちそれであった。また悪質なものの中には、反革命組織をつくって公共財産の破壊をおこなったり、機密情報をぬすんだり、殺人放火をおこなったりしたものさえあった。こういう状態をそのままに放置しておいたならば、プロレタリアート独裁は腐蝕され、段々に無力化されて、やがていつの日か、全国的な反革命がおこることは、明かであるように思われた。

復員兵士たちがこうした事態を前にして、心を痛めていたとき、この問題は中共中央でもとりあげられた。中共中央は、反革命の芽を未前につみとるべく、一九六三年農村に派遣すべき数十万の工作隊の訓練をはじめた。そして訓練が終ると、これを一斉に農村に下らせ、そこでの社会主義的教育運動の先頭に立たせた。この運動は名前こそ「教育運動」であったが、実は教育だけをやる運動ではなかった。運動がやらなければならない仕事は、次の五つとされていたからである――

- 一、階級敵に対する闘争
- 二、社会主義教育―社会主義社会の階級闘争に関する毛沢東思想を大衆につぎこむ
- 三、貧農、下層中農の組織化
- 四、四清―人民公社の政治、経済、組織、思想を清める
- 五、幹部の労働参加

このうち一番基本的なものは階級闘争であるとされた。したがってそれは「教育運動」というまことにさりげない言葉でよばれていたにもかかわらず、実は階級闘争であった。この運動の基本方針は、階級闘争を中心として、上記の五つの要点をしっかりと掴み、思い切って大衆を動員し、社会主義教育を段どりよく展開し、九五パーセント以上の大衆と幹部を団結させ、資本主義勢力と封建勢力の攻撃を撃退し、幹部と大衆の社会主義的自覚と階級的自覚を高め、農村の基礎的な組織を整頓し、集団経済を健全強化し、農業生産を発展させるところにあった。

したがって農村にはいっていく工作隊も、農村にはいって、たゞその上っ面だけを撫でるのではなく、その深部から問題をつかみだし、それと対決する心構えが必要であるとされた。工作隊を農村に入れるに当って、従来とちがった方法がとられたのも、そのためであった。従来とても幹部が農村に下る場合はあったが、そんな場合には

人民公社の管理部に連絡し、人民公社の管理部を通じて生産隊にはいつて行くのが常であった。しかし、こんなやり方をすると、人民公社では中央の幹部に自分のところのボロをしられたくないので、わざと成績のよい生産隊を指定して、そこに幹部を入れるおそれがあった。これではせっかく幹部が生産隊にはいつても、どこに問題があるのかわかるわけがなかった。そこでこのときは、人民公社の管理部を通さずに、直接工作隊を生産隊に入れる方法がとられた。

生産隊にはいつていつた工作隊員は、なるべく貧農や下層中農と同じ家に住み、同じ釜のめしを食べ、同じ労働に従事しながら、かれらとの交流を深め、生産隊の各戸について調査をおこない、その生産隊のどこに問題があるかを確めた。そのかたわら工作隊員は、大衆に対して毛沢東思想の教育をおこない、社会主義社会においても階級闘争を忘れてはいけないということを大衆に教えた。古い世代のものには、以前かれらが地主から搾取されていた時代の苦しかった体験を憶いおこさせ、かれらの階級感情を触発するとともに、若い世代には、革命の勝利が簡単にえられたものでないこと、資本主義が復活すればかれらも亦かれらの両親や祖父と同じような苦勞をなめなければならぬことを教えた。各地で故事会や訴苦会がひらかれ、家史の編纂がおこなわれて、旧地主や富農、反革命分子の復讐陰謀に対する警戒心が煽られた。そしてこれを未前に防止するためには、社会主義による以外に解放されることのない貧農や下層中農が団結をする以外にないことが、訴えられた。このような訴えは、貧農や下層中農の間に、すぐ活潑な反応をみいだした。かれらの間にはさきよのべたような復員した兵士達もたくさん混っていたので、活動家を集めるのに事欠きはしなかった。そこで先づこれらの活動家を中心にして貧農、下層中農協会がつくられた。さいしょこの組織はまず生産の基本単位である生産隊のなかにつくられ、生産隊レベルの組織ができあがったところで、こんどはそれを基礎にして生産大隊レベルの組織が、また生産大隊レベルの組織ができあがったところで、こんどはそれを基礎に

して、人民公社レベルの組織がつくられるという風に、漸次下から上に向って組織化がすすめられていった。

このようにして貧農、下層中農の中核的な組織ができる、この組織を中心としてそのまわりに上層中農や腐敗に反対する他の人々が、糾合され、四清運動が展開された。四清運動はさいしょ人民公社の帳簿、倉庫、財産、労働点数を点検し、人民公社内にもぐりこんでいた旧地主や富農の代理人やかれらに誘惑され、たぶらかされて変質した幹部の不正を糺すことから始められたが、後には経済の分野だけでなく、肅清の手は政治、組織、思想の分野にまでばされていった。運動をすすめるに当っては貧農・下層中農を中心になるべく多くの人々をその周囲に結集し、闘争対象を孤立させる作戦がとられた。それで誤りを犯した幹部でも、その幹部が自分の誤りをみとめて、弁償すべきものを弁償すれば、これを快よく味方に迎え入れて、いっしょに運動を推進するという方法がとられた。これに反して誤りをみとめない幹部や重大な犯罪を犯した幹部は、或いは追放され、或いは処罰された。またこれらの幹部とちがって、常に農民の先頭に立って、四清のために戦った幹部は、その名誉を表彰された。

同じ幹部でも或る幹部は誤りを犯して処罰され、他の幹部は功績を立てて表彰されるのは、前者は大衆から遊離し、後者は大衆と密着しているところにその原因があるとされ、幹部が労働に参加して、常に大衆と苦楽をともにすることが奨励された。そのため今までお高くとまって旦那風をふかしていた幹部でも、この運動の過程に労働参加の習慣をつけて、その工作态度を改めたものもあった。

このようにして幹部と大衆との団結は強化され、中国の全農村で旧地主や富農、反革命分子などの勢力が追いつめられていった。犯罪を犯したものは、法にてらして処罰され、法にてらして処罰するほどでもないものに対しては、監視を厳重にする方法がとられた。そのためにこの運動が基本的に終りをつげた一九六五年ごろには、自然災害期に一時もりかえしていた旧地主や富農、反革命、悪質分子などの勢力は、ふたたび大きな後退を強いられていた。

毛沢東思想の活学活用

人民解放軍における毛沢東思想の学習運動が大きな成果をおさめると、解放軍に学んで毛沢東思想の学習運動を全国にひろげようとする運動がおこってきた。一九六三年ごろから「解放軍に学べ」というスローガンのもとに、毛沢東思想の学習運動が全国的に展開されたことは、これを示している。農村では毛沢東思想の学習運動は社会主義教育運動のなかでおこなわれ、四清運動の原動力となったが、都市でもこの運動は住民の思想改造の上で大きな役割を果たした。運動のすゝめかたは、毛沢東の著作を全部よめというのではなく、初歩の人にはたゞ毛沢東の著作のなかから選び出された三つの論文をよますことにした。「人民に奉仕せよ」、「医師ベチューンを記念する」、「愚公山を移す」がすなわちそれであって、これらは「老三篇」とよばれ、「毛沢東選集」の頁数にして、全部で八頁ぐらいのものであった。これをくりかえし、くりかえし、学習するのであったが、くりかえすといっても、それを暗記するのではなく、自分の仕事にあてはめて学ぶ、換言すれば毛沢東を自分の仕事に活用することを学ぶのであった。

このようにして毛沢東思想の活学活用が奨励された結果、今まで思想とか、哲学とかいうものは自分達の生活とは関係ないと考えていた人々のなかに、毛沢東の思想や哲学を「活学活用」するものがあらわれてきた。今そのなかから一、二の例をあげてみると、次のごときものがあった――

例、一、毛沢東思想で西瓜を売った話

上海市果物雑貨公司閘北区公司の周信礼という支配人は、毛沢東思想を活学活用して、西瓜販売で好成績をあげた。

西瓜販売で困ることは、腐れによる損傷率が高く、コストがかさむことであった。一九六四年西瓜は豊作で、西瓜の市場に出廻る量は大中にふえる見込みであったが、そのなかでどうして損傷を少くするかが、公司にとっての大問

題であった。そこでかれは、西瓜をどう売りさばくかという問題をもちながら、毛沢東の「矛盾論」を学習しなおした。その結果、かれがしったことは、西瓜販売を立派にやってのけるためには、西瓜販売のなかの矛盾を認識し、それを解決しなければならぬということであった。そこでかれは西瓜販売のなかのどこに矛盾があるかを追及し、それらの矛盾のなかで主要な矛盾は何かをつきとめた。西瓜販売の矛盾のうち、主要な矛盾は、商品がどつと市場に出廻るのに、販売力がこれに即応しえないという矛盾、換言すれば、取扱う西瓜の量が大きいのに、販売網と販売店が少なく、人力が少く、運送力が弱く、保存する場所が少なく、管理活動や業務技術の面でもこれに即応しえないという矛盾が、すなわちそれであった。

矛盾を発見した以上、次に必要なことはそれを解決することであったが、それを解決するには、それを解決する確信をもつことが必要であった。そこでかれは毛沢東の「人民に奉仕する」と「愚公山を移す」の二つの論文を学習した。「人民に奉仕する」という論文では、人民に奉仕するということは、かれの場合農民たちが都市の人民に供給するために苦心してつくった西瓜を、立派に売りさばくことであるということを学んだ。「愚公山を移す」という論文では、古代の愚公が二つの大きな山を動かすことを決意したように、かれは西瓜販売活動のなかにある「腐る」という大山を、動かす決意をもつべきことを学んだ。

思想上の問題はこれでよいとして、さてどうして西瓜を立派に売るかという活動上の問題が次に残されていたが、そこには確かにノルマは重く、力は弱いという矛盾があった。そこでかれは、毛沢東の「優勢な兵力を集中して敵を各個にせん滅せよ」という論文を学習した。かれの会社は、西瓜のほかにその他の果物、各地の特産物、煙草、酒、菓子などを扱っていたが、兵力を均等に分散するという古いやりかたでは、「西瓜が腐るという敵」をせん滅できないことが明かであった。ここにおいてかれは、兵を集中するために、売場の勘定係を整理し、その他の戦線の人力と

場所を縮小して、西瓜を販売する勢力を拡大した。西瓜を売る兵力は大きく集中され、西瓜販売の全戦線を立派に戦う条件がつくり出された。

ところが、そこにまた一つの大きな困難がおこった。台風のために運ばれてきた西瓜が船艙のなかでむれてしまい、ぐずぐずしていると腐りそうになったことが、すなわちそれであった。ところが毛沢東の「矛盾論」は、革命家は「困難を一步一步克服し」、その努力によって「困難な局面を順調な局面におきかえることができる」ことを教えていた。そこでかれは会社の従業員の先頭に立ち、どしゃぶりの大雨をおかして、西瓜を船艙から徹夜で商店に運びこんだ。また販売網や販売店についても工夫をこらし、日頃は果物を扱っていない会社の出先の店にも、ことごとく西瓜を扱わせ、同時に露店を出し、以前二九カ所であった販売網や販売店を一一八カ所にふやした。売り方にしても、店で売るだけでなく、持ちまわって売ったり、工場にもちこんで売ったりした。また丸ごと売ったり、切って売ったり、その場で食べさせたり、いろいろ工夫をこらした。この外西瓜を運ぶ際にも途中で西瓜が損傷しないように、事前によく車輛を検査、修理し、大型トラックだけでなく、会社の動員しうる一切の小型三輪トラック、三輪車を使って、迅速に事を運んだ。そのために損傷率をひき下げることができた。

これとやらんで会社では会議をへらし、商品の仕入と販売状況、気候の変化、思想の動態の分析は、毎日夜一〇時以後これをおこなって、適時調整措置をとった。

そのために一九六四年の西瓜販売活動は、前年に比して、販売量はふえ、コストは下り、損傷率は下り、総利益率は上り、会社は利潤一九〇〇〇〇餘元(二八五万餘円)を上げ、社会主義建設のための蓄積をふやすことに成功した。

例、二、毛沢東思想を理髪に活用した話

済南市の理髪師李徳訓は、毛沢東思想を学んで、それを理髪に活用した。

かれは、毛沢東思想を学ぶまでは、お客さんの頭をうまく刈ることだけを考え、それを政治に役立てようなどとは考えたこともなかった。毛沢東の「正しい政治的観点がないのは、魂がないのと同じである」という教えを学んだかれは、この教えを自分の仕事と結びつけてくりかえし考えるうちに、はじめてこの毛沢東の教えがすべてに通用する真理だということに気がついた。かれは考えた―バリカンやハサミを使っている間でも、理髪師が政治を念頭におき、毛沢東の教えにしたがって大衆に奉仕する心構えをもっていたら、党のもつ教育力と社会主義制度のよさをお客に感じさせることができる筈である。そこでかれは仕事をするときには、お客に対し政治的、思想的働きかけをするように注意した。それによって頭を刈ることも革命することだという意識を身につけた。

かれは「階級社会では、だれでも一定の階級の地位において生活しており、どんな思想でも階級の烙印のおされていないものはない」という毛沢東のことばから、髪の色も階級意識の反映であるということに気がついた。或る日、二〇才をすぎた若い労働者が理髪にやってきた。みれば 作業服を着ていながらリーゼント・スタイルでヒゲまではやっていた。こんな格好では労働者階級のイメージを損うと考えたかれは、その若者に対し、ヒゲをそり落とし、髪も短く刈るようにすすめた。すると若者は「もう何年もこうしているのだから、このまゝに刈ればいゝじゃないか」といって、腹を立てた。普通だとこれでひき下るところであったが、若者の髪の色をブルジョア思想のあらわれだと思つたかれは、「こんな髪の色は仕事にも不便だし、不潔で、品がわるいじゃないですか。それに若いのにヒゲをたくわえるなんてみっともないですよ。これはあなたの問題だけじゃありません。わたしたちの新しい社会と労働者階級にも影響をあたえますからね……」と我慢強く説得した。その結果若者もようやく納得して、「若者刈り」にした。

その後若者の属していた工場で社会主義教育運動がおこなわれ、若者の階級的自覚が進むにつれ、かれの忠告した

この意味が、若者にもよくわかるようになり、かれは若者から感謝された。

しかし、かれは毛沢東思想の学習をしているうちに、人民に奉仕するためには、理髪の仕事をしたが政治の仕事としてするだけでは足りず、お客のもとめているもの、つまり客観的な法則をつかんで行かなくてはならないということに気がついた。この法則をつかんで仕事をすれば、お客に満足してもらえらるること受合いであることもわかった。

理髪の仕事のなかでの客観的法則とは何であったか？かれは実践をくりかえして認識を深めたけっか、お客のもとめているのは、うまく刈ってほしいということ、つまり「清潔で、質朴で、品がよく、仕事やしやす」ということだとわかった。しかし、うまく刈ってほしいといっても、お客によって好みも要求も違うわけであった。大体、年配の人は髪をのばしている人が少なく、丸刈が多いので、きれいに刈りそろえてほしい、ゆっくり刈ってほしいという希望をもっていた。若い人は髪をのばしている人が多く、職業、体つき、顔つきによって要求もちがった。いそがしいお客は、待ち時間も理髪にかける時間も短くしてほしい、それでいてきれいに早くと望んだ。急がないお客の多くは、年配の人や病人や休日か退勤後の人であった。この人たちは理髪をし、休息をとるのが目的で、早くしてくれとはいわなかった。

実践のなかから以上のような客観的法則をさぐりあてたかれにとって、次に問題となったのは、自分の行動をどうしてこの客観的法則に当てはめるかということであった。毛沢東思想を学習しているうちに、毛沢東が「主要な矛盾をつかめば、すべての問題はたやすく解決できる」といっていることが、目にとまった。そこで理髪の仕事のなかでの主要な矛盾とは何であるかを考えた。くりかえし、くりかえし、考えてゆくうち、理髪の仕事のなかでの主要な矛盾とは、理髪師の奉仕とお客の実際にもとめているものとの矛盾であり、矛盾の主要な側面は理髪師の側にあることがわかった。理髪師の主観的な能動性を發揮することと、客観的な法則を守ることを統一すれば、この矛盾は解決で

きる筈であった。そこでかれはお客様に満足を与える奉仕の方法を研究し、それを次のようにまとめあげた――

「お客様を暖かく迎え、よく気をつけて仕事をし、謙虚な気持ちでお客様の意見に耳をかたむけ、お客様が満足するまで辛抱がよく手なおしをする。まいた布で首が苦しくないか。どんな髪のかたちにするか、痛くはないか、お湯やドライヤーが熱すぎはしないかどうかをたずねる。こちらから先にあいさつし、相手の気持ちを汲んでタオルを渡し、本やお湯をすすめ、ふさわしい髪のかたちをすゝめ、仕上がりを鏡にうつしてお客様の意見を求める。」

この方法を実行したところ、多くのお客様の満足を克ち得た。しかし、問題はまだ残っていた。一、はやく刈ることと立派に刈ることとの関係、二、忙しいことと暇なこととの関係、三、奉仕の態度と奉仕の質との関係が、すなわちそれであった。

以前、かれは早くやれば立派にはできず、立派にやろうとすれば早くやれないと考えていた。これは量と質との関係の問題であって、「早く」ということを「立派に」ということから切りはなして考えてもいけないし、「立派に」ということを「早く」から切りはなして考えてもいけない。両者は対立物の統一であり、対立しながらも互いに関連していたので、ある特定の状況のもとでは、お客様のそれぞれの要求で両者は転化し合う関係にあった。したがって杓子定規に考えるのは禁物であることがわかった。そこで急ぐお客様には早くというお客様の要求をみたすなかで、刈る方もなるべく立派にやるように心掛けた。

お客様もそうであったが、理髪師にも忙しいときと、暇なときがあった。両者の関係をどう扱うかは、お客様の必要に答えるかどうかの大切な問題であった。理髪師が忙しいときはお客様の暇なときであり、お客様の忙しいときは理髪師の暇なときであった。しかし、理髪師はお客様の都合にしたがうのが当り前であった。以前かれはこの関係をハッキリ掴んでいなかったので、前からのしきたりに従って、出勤し、退勤していた。ながい間観察をつづけているうちに、か

これは理髪師の出勤前、退勤後、昼食時間、夕食時間を利用して、理髪をやらせてもらいたいお客が、たくさんいることがわかった。そこでかれは同僚たちと相談して、この問題を解決する方法を研究した。そのきっかけ、出勤前に当直者二名をおいて、お客の来店にそなえ、食事の時間に適当にあとにずらせ、交替して食事に行くようにし、店にもちゃんと十分な人数を残しておくようにした。夜は、閉店時間が来てもお客があれば何人かゞ仕事をつゞけ、残りの者であと片付けをするようにした。お客が帰ったら、あと片付けも終わっているの、みんなそれぞれ帰って休んだ。こんな具合にしたので、労働と休息の按配もうまくゆき、お客にも満足をあたえることができるようになった。

奉仕の態度と質の問題は、実は思想と技術の問題であった。奉仕の態度がよくても、理髪の仕事がよければ、お客から口八丁だといわれるし、理髪の仕事がよくても、奉仕の態度がわるくては駄目であった。それで人民に立派に奉仕することをもとにして、奉仕の質をよくする一方、奉仕の質を上げるたてまえで、もっと態度をよくしていく必要があった。それに気がついたかれは、前にもまして毛沢東思想の学習に精を出し、自分の誤った考えを改めるとともに、技術をみがくために努力した。理髪師の仕事は立ちづめの仕事であるから足を鍛えておく必要があると考えたかれは、自動車のなかでも、汽車のなかでも、旅館でも、グループの討論会の席でも、資料をよむときでも、できるだけ立っているようにした。足を鍛えて、立派に人民に奉仕するためであった。

毛沢東思想の活学活用の例は、まだこのほかに挙げればきりがないわけであって、工場労働者も、農民も、バス・ガールもスチュアーデスも、トラックや汽車の運転手も、医者も、看護婦も、教師も、学生も、それぞれの持ち場で、毛沢東思想を学習し、その活学活用につとめた。

これは中国共産党内の毛沢東派の人々からは、中国の労働者や農民が毛沢東思想をかれらの思想的武器として利用しはじめたものとして、高く評価されたが、一方中国共産党のなかでも、毛沢東思想の学習が毛沢東の個人崇拜を助

長し、かれの個人独裁に導くことをおそれた人々や、一部の文化人、学者達の間では、このような現象は毛沢東思想の「低俗化」、「単純化」、「実用主義」、「教条主義」として、白眼視された。(未完)